環境科学年報—信州大学— 第16巻, 1994
〔Ann. Environ. Sci., Shinshu Univ.〕

ロンドンのエコロジーパーク（生態園）

土 田 勝 義
信州大学教養部自然保護

The Ecology Parks in London

Katsuyoshi TSUCHIDA
Lab. of Nature Conservation, Fac. of Liberal Arts, Shinshu University.

Key words：ecology park, nature reserve, London,都市公園

はじめに

最近、日本でも都市の環境保全に関連してエコシティという概念が話題になってきている。環境保全型都市、自然と共生する都市、自然を生かしたまち(づくり)とかもいわれている。現代の日本の多くの都市は、その発展過程において、ただいわゆる都市化のみで発展してきたといえる。道路、交通、住宅、町並み、公園、店舗、工場など都市を構成する諸要素は無秩序に発展し、あるいは商工業優先のもとで、都市住民の生活環境は常に犠牲や後送りにされてきた。さらに様々な公害に悩まされ、不健康な生活を余儀なくされてきた。またわずかに生き残っていた都市の中の自然も失なわれ、いわゆる都市砂漠となってしまった。この状態は日本のみならず、諸外国の大都市でも同様であった。しかし社会が安定し、ことに成熟社会といわれるヨーロッパの諸都市では、自然と隔離された都市住民の自然へのあこがれ、あるいは渇望が高まり、自然をとり戻すさまざまな運動が生まれた。その結果、行政もそれらに対応するさまざまな政策、施策をおこなう時代となった。その考えをまとめると先のエコシティというものに集約されるであろう。またその施策の一つとして都市の中の緑豊かな公園の充実が重要な課題となる。いわゆる都市公園（普通にみられる公園）は都市住民の憩いの場であり、人工的な都市の中のオアシスである。ここで筆者は1993年9月、イギリスのロンドンのさまざまな公園を視察する機会を得たが、いわゆる都市公園そのものに関する資料や論議は他に多数あるのでここではあまり触れず、それとは趣が異なる「自然」を導入したロンドンのエコロジカルパークまたはエコロジーパーク（ecological park, ecology park：日本では生態園と訳されている）についてその概要を紹介し、砂漠化した日本の都市においても、エコシティの実現のためにその概念や方法の導入の可能性を検討する材料としたい。

エコロジーパークの概念

いうまでもなく、ロンドンは人口800万人の大都市である。日本の大都市と違うところは多々あるが、とくに目につくことは都市公園といわれる、ハイドパーク、グリーンパーク、リージェントパークなど緑の大公園があちこちにあることである。これらの公園は都市の中にあって広大な面積を有し、またその存在は都市住民や訪問者の憩いの場であるばかりでなく、都市の環境保全や、景観保持に大きな役割を果している。ロンドンは東京なみの車社会であるが、これらの公園はその騒音、排気ガスのシャワーから逃れることができる緩衝地帯でもある。これらの公園に特徴的なことや共通なものは、広いこと、芝生が多いこと、森でなく木立が多いこと、樹木は巨木が多く、ほとんどが植栽のプラタナスであり、他に植栽されたマロニエ（トチノキ)、ナラ、カエデなどの落葉樹が主なものであること、大きなポンド（池）があって、水鳥が多数飼育されていること、ときどきリスの姿が見られること、立派な花壇が作られていることなどである。利用面では、芝生等への立ち入りが許されていること（サッカーなども可)、水辺で水鳥を観察したり餌をやって遊べること、ベンチはあるがあまり多くないこと、犬の散歩が

認められ、ふんの捨て箱がごみ箱なみに多数置いてあること、自動販売機が無いことなどである。総じていえば、人工的な公園で、多目的に利用され、管理が行き届き、ごみなどがほとんどない庭園風な公園である。従って当然であるが自然公園ではない。

ロンドンは産業革命以後、都市化とともに周辺にあった自然を改変し、土地造成をし、運河を造り、鉄道を建設した。そのためほとんど自然は失われ、消滅してしまった。一方では都市公園のような広大な芝生公園が造成された。ところで、このような都市公園とは異なる公園が1970年代末からロンドンの市内にみられるようになった。これらは総称としてnatural parkと呼ばれ、最初にできたのが、タワーブリッジの近くのウイリアムカーチス・エコロジーパークであった。その概念としては、いわゆる都市公園が人工的な管理された公園であるのに対して、都市の中の自然公園または自然の復元公園である。ロンドンはかつて大部分がブナ、ナラ、カエデなどの落葉広葉樹林に覆われていたといわれる。これらが人為によって畑、放牧地、領地、工場、市街地など変容した。産業革命以後はイギリスの産業の集積地となり、ほとんど自然は消失してしまった。

1970年代後半から、ヨーロッパでも国民の環境問題への関心は高まり、また工業社会や物質文明への疑問、産業で荒廃した自然や、人心の回復に人々の関心が高まってきた。都市公園は充実しても、自然度の低い、ありきたりの公園では物足りないこと、また自然・環境教育の場の必要性、少しでも自然の残存している場所の保全、確保などから、ロンドンの自然地域の保全や、失われた自然の復元を求める市民運動が高まった。イギリスにはもともと19世紀後半から、都市の環境の保全や改善を求める市民によるアメニティ運動が盛んであり、上記の自然公園の設定や造成にこれらの運動が中心となった。なおイギリスでは現在これらの活動をしている団体（アメニティ・ソサイティAmenity society）は約1000もあるといわれている（西村：1993）。このような市民運動の中から、都市やその周辺の自然がわずかに残存している地域、あるいは遊休地、空き地などを自然地域（nature area）として保存したり、あるいは自然復元地域としてレクリエーションや、動植物の生態や自然観察の場として利用しようとする運動が生まれた。ロンドンではその第１号が先述のものである。なお現在、自然地域として指定されているものには11種のカテゴリーがあり、以下に述べるエコロジーパークや市民農園（city farm）などもある。

エコロジーパークのすがた

ロンドンにおいては、各種アメニティ団体やトラスト団体などの運動によって、1993年までに52箇所の自然保護区（nature reserves）が設定された。これらは単に保護のみを目的とするものでなく、一般市民に解放された自然園（nature park）または生態園（ecology park）と呼ばれる公園となっている。その様子を筆者が訪問した２箇所の生態園について報告する。なお資料としてロンドンエコロジーユニット（1990）およびＧＬＣ（1985）の刊行書を利用した。なおカムリーストリート自然園に関しては綜合ユニコム（1992）のものも参考とした。

１．カムリーストリート自然園(Camley Street Natural Park)

当園はロンドンの中心地の一つ、キングスクロス駅とセントパンクラス駅のすぐ北にあり、カムリーストリートに面している。広さはわずか0.9haで、道路に沿った細長い地形である。かつては開発に適さない湿地帯であったが、1820年にリージェント運河がここに造成され、またその後両駅が建設されロンドンの鉄道の要所となった。この鉄道駅のために当園辺りは広い石

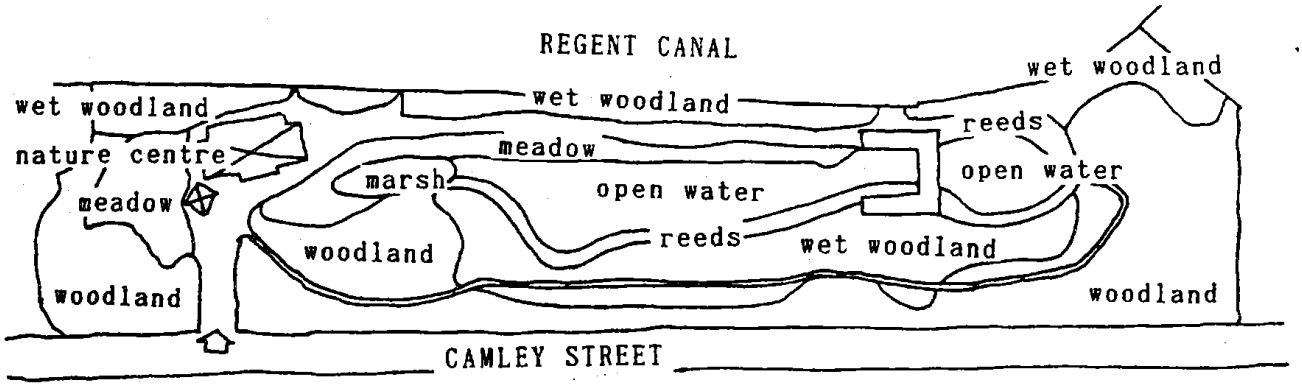

図１．カムリーストリート自然園の概略図

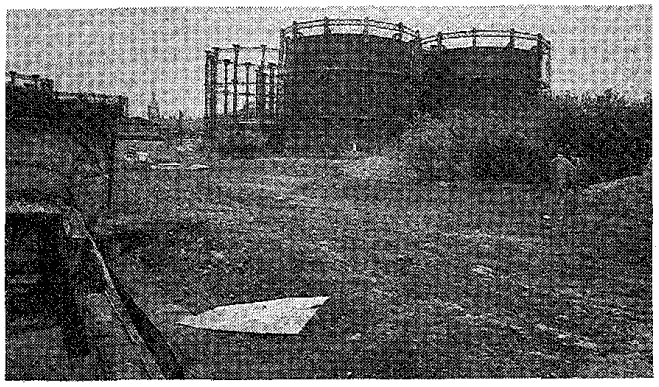

写真１．カムリーストリート自然園の造成時の景観。

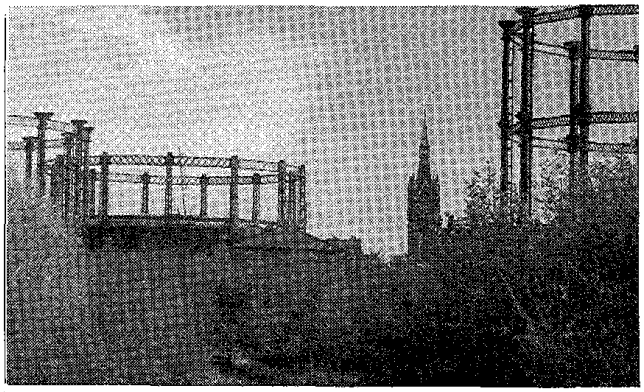

写真２．池などが造成された現在の自然園。

炭置場となったが、その後石炭の需要が無くなり、1950年以後は空き地となって放置された。1981年、大ロンドン庁（ＧＬＣ）は当地をバスターミナル建設用地として買い上げたが、放置している間に自然が回復したため、地元の自然保護団体（Camden Wildlife Group）が自然保護区に指定するよう運動し、その結果自然園とすることが決まった。しかし当地はそのまま自然園とするには不十分で、石炭集積所のごみの片付けから、隣接する運河から引水した池の新造成、ヨシやガマなどの水生植物の植栽、湿生樹木の植栽、築山、自然観察路などの整備がなされ、またビジターセンターの建設も行われ1985年に開園した。運営はカムデン・ワイルドライフグループとボランティアによって行われている。なお資金はグループの上部団体である、ロンドン・ワイルドライフトラスト（London Wildlife Trust）の援助や寄付によっている。

施設としては、図１に示したように、当園は運河と道路に挟まれた細長い地形で、北端に入口があり、門を入るとすぐビジターセンターがある。ここには展示ホール、学習・実習室、事務室がある。専任の職員が２名おり、非常勤職員もいる。センターの前を南に歩道を進んで行くと、運河に沿ってヤナギ類やナラ類、ハシバミなどが木立をつくり、反対側は草地となって野草が生育している。中央には池や湿地が造成され、植栽されたヨシやガマ、アイリス、スイレンなどの湿生、水生植物がよく繁殖している。ここにはトンボやアメンボ、カエルが生息していたり、たまに水鳥も飛来してくる。西側の歩道の両側はやぶ、低木林などで、造成後の植物遷移が進んでいる様子がみられる。園地の南北端は小高い築山でまだ若い６－７ｍの木立となっている。歩道に沿って観察した印象としては、先の都市公園と比べて、あまりにも小さく、粗雑な景観や風物であり、一見放置あるいは最低限の管理下におかれた自然園のようである。しかし植物や動物の種類、景観は多様で、しかも時間的な経過を観察できるようにかなり工夫された園地である。当園は原生的な自然や景観を保全してある保護区でなく、造成されたあるいは復元されつつある自然の保護区であるが、開発が進んだ都市の中での自然保護区としての一つの形態である。なお、このように多様な自然の種類を提供するばかりでなく、自然の移り変わりの様子や、そのメカニズムを示すような生態学的工夫も見られる。さらに伝統的なバードハイド（野鳥観察のための隠れ場）、垣根づくり、野鳥のための草木のやぶなども工夫されており、一見粗雑そうでも実際は相当計算された設計デザイン（エコデザイン）や工夫がなされている公園である。

ここでは、子供のための自然観察会、自然教育、各種イベントが年間を通して行われており、職員のみならず多数のボランティアが協力して活動しており、ロンドンのエコロジーパークの中でももっとも充実した運営が行われている。しかし最近、大ロンドン庁による当地一帯の再開発計画が浮上し、当地は消滅する可能性があり、当園を含めて活発な開発反対運動が行われている。

２．ガナスベリー・トライアングル自然園（Gunnersbury Triangle Nature Park）

ロンドンの西方、ハウンスロウ区のチスウィックにあり、有名なキュー植物園に近い。地下鉄のチスウィックパーク駅のすぐ裏手にある。ここは地下鉄線等の交差する地区で、線路に囲まれた三角形の地形となっておりトライアングルの名がついている。広さは2.6haとかなり広い。この地帯は過去100年前からは果樹園、砂や砂利の採取所、市民菜園などであった。40年前に放置されてからはシラカバやヤナギが育ってきて、

最近ではこれらの森林になってきた。1983年に工場建設の計画が出てきたときに、地元の自然保護団体が建設反対の運動を行った。専門家の調査の結果、自然保護上の価値ある場所として保全さるべきと決定された。1984年に大ロンドン庁の補助金で、ハウンスロウ区が当地を地主の英国鉄道から買い上げ、自然保護区として指定し、ロンドン・ワイルドライフトラストが管理するすることとなった。なお、すぐ近くにはチスウィック公園がある。

図2に示されたように、全体が三角形をなしており、入口は三角形の一つの頂点の部分にある。入ったところにすぐ小さな事務所がある。当地は基本的に湿性地であり、40年の遷移の間に成立したヤナギなどの湿生林で占められている。乾燥した立地ではシラカンバ林が見られる。その中に歩道や自然観察路が設けられている。湿地や小さな池が部分的にみられ、湿生植物群落がよく発達している。また南部の隅には野草地がある。広さもあってまとまった森林としての雰囲気もあり、野生動物も生息していそうである。ちなみにここでは植物は200種、野鳥は47種も認められたという。原生林ではないがロンドンのような都会の中では、自然度の高い景観を有しているために自然保護区に指定されたのであろう。

写真3．ガナスベリー・トライアングル自然園の草地と林。

当園は自然保護区ではあるが、生態観察園としても利用され一般に解放されている。その管理・運営は地元のチスウィック・ワイルドライフグループとロンドン・ワイルドライフトラストによってなされている。しかし常任のスタッフはおらず、週のうち数日パートのスタッフが事務所にいる。スタッフやボランティアは、公園の維持・管理のほか、さまざまな活動をしている。土曜日の午後や日曜日には自然観察会や学習会、また地元の学校の生徒や先生に対して自然教育の場としての利用や指導を行っている。運営資金はハウンスロウ区の補助金、企業の寄付、一般の寄付によってい

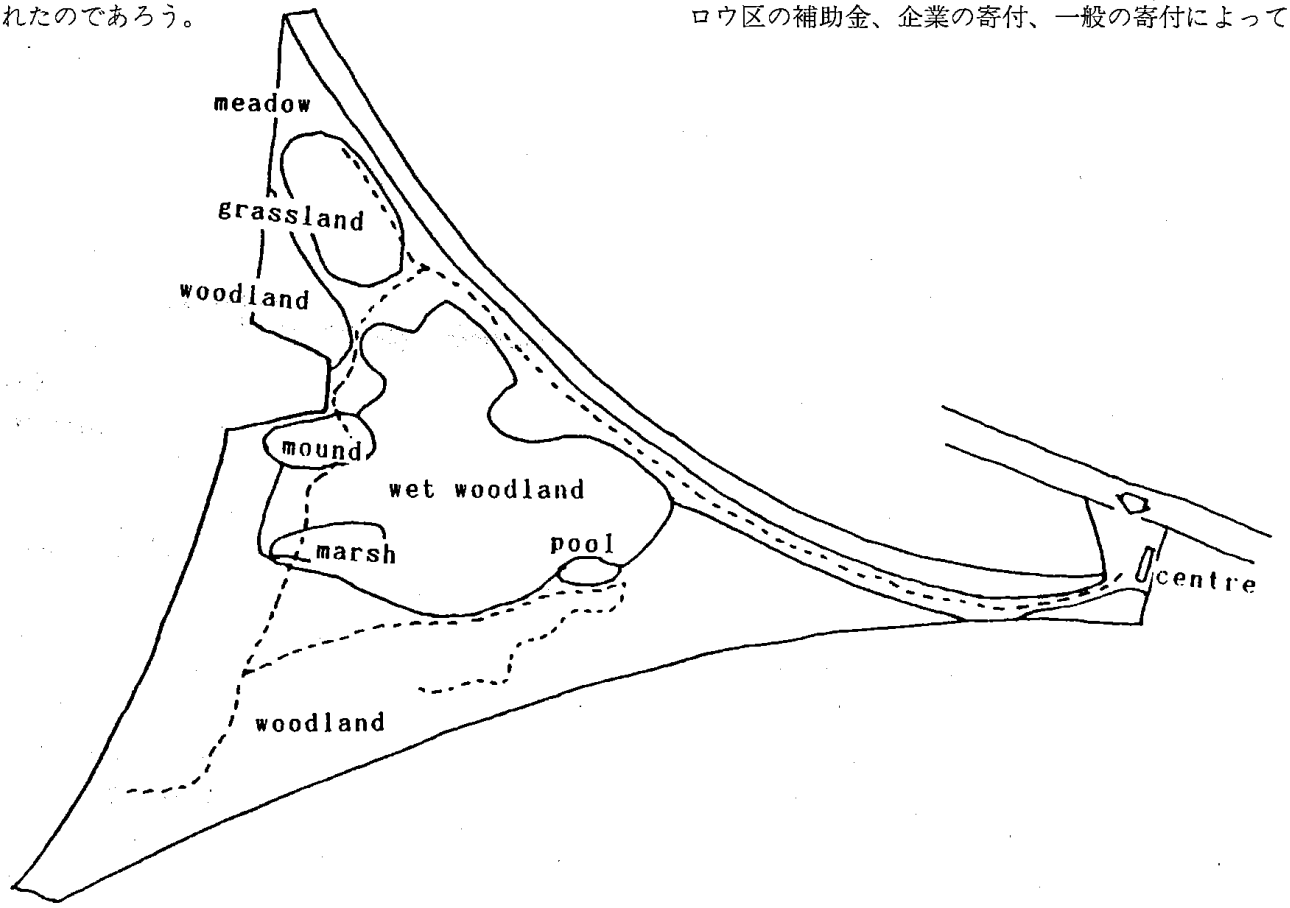

図2．ガナスベリー・トライアングル自然園の概略図

る。今後の計画としてはビジターセンターの建設、常勤職員の雇用、身体障害者への対応などである。

総じて、当公園は、かなり自然らしい公園で、あまり人工を加えず、また人工物も無い自然の雰囲気の高い公園で、景観のみならずここに生息したり生育する動植物の生存、繁殖を保っていこうとする様子である。

以上、筆者が今回訪問したロンドンの生態園は2箇所でしかなかったが、資料、聴取、その他でもロンドンの生態園は大体この2タイプに分けられると思うので、その面ではロンドンのエコロジーパークの概要が把握出来たと思われる。すなわち、わざわざ造成（復元）した自然園と、ほとんどそのままの状態を保全する自然園、またスタッフや管理が充実してるものと、やや放任されているものとである。これらは、その設立の歴史、条件、利用頻度、地理的位置、地元の態勢などの違いによるものである。いずれにせよ、先述した都市公園とは異なったタイプの公園、すなわち自然公園が、ロンドンの市内に点在し、市民が本物の自然（とは必ずしも異なるが）と日常的に接したり、本物の自然を知らずして成長していく子供達が自然の姿を知ったり、学習することができる社会（文化）施設が曲がりなりにも存在することに感銘を受けた。筆者は現在、ドイツのビオトープに関する研究を行いつつあるが、ロンドンまたはイギリスの生態園も概念的、理念的にはほとんど同じであることを認識した。すなわちヨーロッパでは、失われた都市、農村の自然を少しでも取り戻し、復元し、あるものは保全し、日常生活において、そのような多様な自然と共存していこうという文化革命が1970年代後半から始まっているということである。成熟社会に入りつつある日本もこれらを学んでいくと同時に、21世紀をにらんだエコシティ、自然と共生するまち、農村づくりを目指して、日本型の考えや方法も本格的に研究すべき時期にきていると思われる。すでに先進的な自治体では、住民と一緒になって試みている事例もあり、今後の発展が期待される。

参考文献

London Ecology Unit (edit.)：1990. Nature Areas for City People. 166pp. London.

The Greater London Council：1985. Nature conservation guidelines for London. 47pp. London.

西村幸夫：1993. 歴史を生かしたまちづくり－英国シビック・デザイン運動から。170pp. 古今書院。

綜合ユニコム：1992. 環境創造・維持管理　復元技術集成－快適空間の創造と自然の再生。第1巻ランドスケープ・エコロジー編。204pp. 綜合ユニコム。

その他各種パンフレット。

（受付　1994年1月13日）